豊島区内事業所を対象とした放課後等デイサービスの設立経緯と役割について

The establishment and role of after-school daycare in Toshima Ward

牛　木　彩　子*　　定　行　まり子**
Ayako USHIKI　　Mriko SADAYUKI

要□ 約□本研究では，障害児の放課後支援の場である，放課後等デイサービス事業所へのインタビューを行い，質的分析を SCAT[1] を用いて行った。本報告で分析した 4 事業所は，一つは放課後等デイサービスの法制化以前から，活動を行っており，3 施設は放課後等デイサービスが法的に位置づけられてから設立されていた。設立年度に関わらず，子どもたちに一貫した支援が必要であるという考えのもと設立している。一方で，利用待機児童がいること，家族のニーズが，放課後に活動する場所の必要性だけではなく，家族の就労支援と学童保育クラブと同じ役割が求められていることが示された。

□**キーワード**：障害児，放課後，放課後等デイサービス

Abstract□This study interviewed personnel at after-school daycare facilities, which are places providing after-school support to children with disabilities, and it performed a qualitative analysis using SCAT1). Four facilities analyzed in this study began operations before after-school daycare was legislated, and three facilities were established once after-school daycare was enshrined in law. Regardless of when the facility was established, the facilities were established with the belief that children need consistent support. That said, there are children waiting to use those facilities, and family need not just a place for children to participate in after-school activities but also employment support and a place serving the same function as parent-run after-school daycare.

Key words：Disabled child, After school, After-school daycare

1　はじめに

障害のある子どもたちが放課後を過ごす場所として放課後等デイサービス（以下放課後デイ）は 2012 年以降増加してきた。しかし，放課後デイでの活動内容の意義や子どもたちやその家族のニーズについての調査研究は少ない。

放課後等デイサービスの実態把握 及び質に関する調査研究 報告書[2] は，「具体的な活動を設けず，本人が自由に過ごせる時間を提供している事業所は 87.1％であった。子どものニーズとサービス提供目的の明確化は必須であり，放課後等デイサービスの枠組みの中で， どう子どもが過ごせることが望ましいのか，そのためのサービス提供はどうあるべきかの議論が必要」と述べている。筆者の 2016 年の調査[3] でも，放課後デイ内で行われている活動は多種多様であったが，提供されているサービスがどのような目的で行われているかについての回答は得ていない。そこで，今回，複数の放課後デイの事業所が隣接している都内 T 地区インタビュー調査を実施し，設立経緯，利用する子どもたちの放課後デイの状況をから，放課後デイの役割について考察する。

*　家政学研究科住居学専攻
Graduate School of Home Economics,
Division of Housing and Architecture
**　住居学科
Department of Housing and Architecture

２　調査方法

インタビュー調査は，東京都内Ｔ区の同一地区の放課後デイで承諾の得られた 4 事業所に，2019 年 9 月 24 日から 11 月 5 日までの間に実施した。インタビューは，事業所の施設長または，児童発達支援管理責任者に行った。

インタビュー内容は，施設概要，設立経緯，利用する子どもたちの概要，子どもたちが利用する部屋やスペース，建物の改修，避難訓練の状況などである。

本報告では，インタビュー内容のうち，設立経緯，子どもたちの概要についての分析を行った。

分析手法は，大谷による SCAT[1] を用いて質的分析をおこなった。具体的には，録音された発話を記録（テクスト）し，テクスト中の注目すべき語句を抽出し〈２〉，抽出した語句を一般化した概念に置き換え〈３〉，〈４〉で〈３〉までの事柄を表すような「テーマ」をとらえて概念化する。それらをあわせて，データに記述されている出来事に潜在する意味や意義を抽出し（ストーリーライン），ストーリーラインから全体に共通する事項を記述（理論記述）した[1]。

本稿では，テーマごとに，各施設のインタビューからでたテクストを一つの表にまとめて示している。

３　結果

施設Ａは 2015 年開所の 10 名定員の事業所と 2018 年開所の 5 名定員の重症心身障害の子ども対象の事業所を持っている。施設Ａのインタビューは一施設として実施・記録している。

2012 年以前から活動をしていた施設は施設 D のみであり，他は 2012 年以降の開所である。利用定員はどの施設も 10 名であるが登録人数は，それよりも多い。

Table 1　Overview of after-school daycare

	施設A－１	施設A－２	施設B	施設C	施設D
インタビュー対象者の職種	施設長・児童発達支援管理責任者		児童発達管理責任者	施設長・児童発達支援管理責任者	施設長・児童発達管理責任者
開所年	2015年	2018年	2016年	2016年	1987年
運営主体	株式会社		株式会社	株式会社	社会福祉法人
利用定員	10人	5人	10人	10人	10人
登録人数	41人		約100人	36人	20人
子どもたちの障害種別	発達障害 知的障害	重症心身障害	発達障害 知的障害	発達障害 知的障害 視覚障害	発達障害 知的障害
年齢層	小学生から高校生	小学生から高校生	小学生	小学生から高校生	小学生から高校生
平日の開所時	下校から17時		1日90分のプログラム	下校~17時30分	下校から19時
主な過ごし方	自由活動		運動プログラム	創作活動 自由活動	運動 創作活動 自由活動
設立の経緯	設立者の経験、周囲の保護者からの要望		就労支援事業から、子どものころから、就労に必要な支援の必要性を考えたこと	設立者の福祉施設での経験から子どもたちへの一貫した支援の必要性を感じたこと	在宅障害者の支援を行う中で、子どもたちのニーズにももともと答えていた。法制度が出来たところで、法制度を利用。

知的障害・発達障害の子どもが主に利用しているが，施設Aは，重症心身障害の子どもたちの事業所を2018年に開所し，施設Cは，週1回，視覚障害の子どもたち対象の曜日がある。利用時間は，施設A.Cは下校~17時，17時30分であり，夕食を提供している施設Dは19時までである。施設Bは，90分のプログラムを基本としており，プログラムの時間に合わせて子どもが通ってくる形態となっている。

放課後デイでの子どもたちの主な過ごし方は，施設B以外は子どもたちが自由な活動をする時間が多くとられており，そのなかで，創作活動や運動プログラム，外出を組み込んでいる。

放課後デイでの設立経緯を聞く中で，出てきた思いと役割についてのテクストをまとめた（表２）。

施設Aの「1人で過ごすことが出来ても，放課後にお友だちとの交流で社会性を育てる機会がない」「社会性を身につける環境の必要性」から，「1人ですごすことが出来ても，放課後にお友達との交流で社会性を育てる機会がないという，自身の体験からから他の子ども達への思いにつながった。」というストーリーラインとなった。また，施設Aでは「学校以外の社会性を身につける場と学校卒業後の就労の選択肢」，施設Bでは，就労支援事業を行う中で「社会性に必要なスキルは小さいころから身につけていくことが必要」とし，「就職など将来を見据えたスキルの支援が必要である」というストーリーラインになった。施設Dでは，「放課後の遊びのための余暇活動の場を提供」「開設当時からの社会情勢の変化で，保護者が働いている間に預ける場所としてニーズが増えてきた」ことから，「子どもたちのニーズは，放課後デイが制度化される以前からあり，活動の場の提供をしてきたが，法制度が整ってきてから，保護者の就労支援のニーズも増えた」。というストーリーラインとなった。

施設B，施設Cでは「一貫した支援」「一貫したサービス」という言葉が出てきており，「子どもたちには，将来を見据えた一貫した支援が必要である。」というストーリーラインとした。

これらのストーリーラインから，「放課後デイの設立者の思いは，学校以外の社会性を身につける場と学校を卒業した後を見据えた，一貫した支援の必要性にある。一方，重度の障害を持つ子どもたちのレスパイト的な家族支援，家族の就労支援の役割がある。」という理論記述を行った。

次に，利用定員についての質問の流れから，利用している子どもたちの状況についての発言を分析した。

施設Aについて，利用するお子さんについてのSCAT分析が表２である。

テクストから，待機児童，送迎距離，利用する子どもの状況というテーマがストーリーラインとして記述された。理論的記述として，「利用範囲は決まっておらず，地域の道路状況では，送迎に時間がかかる。待機児童がいる要因の一つは，放課後デイ以外で過ごす能力がついてきた高学年の子どもたちでも，放課後デイで過ごすことを選択し，新たな子どもを受入れられないことである。」とした。

施設Bについての利用するお子さんについてのSCAT分析が表3である。テクストから限定されたプログラムの目的，限定された対象の子どもたちというテーマがストーリーラインにあがった。理論的記述として，「子どもたちの障害の程度がある程度そろうことで，子どもたち自身が過ごしやすい環境や，集団での生活のスキルを身につけるという限定した目的をもった集団プログラムが組みやすく，療育の目的を明確に示しやすい。しかし，目的が明確になったプログラムのニーズがある一方で，毎日を過ごす場としてのニーズも聞かれる。」とした。

施設Cについての利用するお子さんについてのSCAT分析が表4である。テクストから，放課後デイ以外への活動の広がり，学童保育クラブでの困難感，放課後デイの複数事業所の利用というテーマがストーリーラインとして記述された。

理論的記述として，「コミュニケーション能力,など，学年が上がるにつれて，放課後デイ以外の活動の広がりがみられる一方，学童保育クラブより放課後デイを選ぶ子どもがいる。放課後等デイはその活動内容だけではなく，開所日も選択の基準になる。」とした。

施設Dについて利用するお子さんについてのSCAT分析が表5である。テクストから，活動プログラムのニーズと保護者が仕事に行くための預かりのニーズ，継続した支援，学童との併用について抽出した。理論的記述として「継続した支援のためには，週の回数を多く継続してきてくれるほうが良い。しかし，セーフティネットという意味では，複数の事業所を利用していることは安心につながる。放課

Table 2　Thoughts at the time of establishment

番号	発話者	テクスト	<1>テクスト中の注目すべき語句	<2>テクスト中の語句の言いかえ	<3>左を説明するようなテクスト外の概念	<4>テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）	<5>疑問・課題
	質問者	設立の経緯を聞かせて下さい。					
34	施設A	(仕事をしていたのでお子さんは）家で自分の好きなものを、自分の好きなように見るみたいなのが、DVDだったりとか。児童期もそれで過ごしちゃったから、今更それを変更できないですよね。	DVDだったり、児童期もそれで過ごしちゃった	親が仕事の間、放課後は自宅で一人で過ごす	自宅以外に活動の場がなければ、自宅で過ごすことになる	1人でずごすことが出来ても、放課後にお友達との交流で社会性を育てる機会がない	放課後の場がない障害を持つ子どもたちはどのように過ごしていたのか
36	施設A	周りの保護者の方から言われたときもありますし、、他の子はもうちょっと外に出る環境ができて。少しの大人の手の力でそれこそ、お友達同士で社会性を身に付けていかれるんであるなら、そのサポートをできる環境を作りたいなという思いですよね。	少しの大人の手の力でそれこそ、お友達同士で社会性を身に付けていかれるんであるなら、そのサポートをできる環境を作りたいな	保護者の思い、友達と過ごすことでの社会性	社会性は、人との交流が必要	自分の子どもから他の子ども達への思いのつながり。社会性を身に着ける環境の必要性	
25	施設B	一つは、社会情勢的に、今も一億総活躍社会というようなのも含めて、働きたくても働けない障害者の方たちに対して、企業も法定雇用率含め、人手不足もありますので、人材がほしいっていうところを、お互いにミスマッチがあるのを就労以降というサービスでアジャストさせていけるのかなっていうところで進めたんですが。小さな頃から子どもたちが過ごしやすい環境だったり、過ごしやすい方法であったりっていうのを身に付けていくことが、大人になったとき重要なのかなというところに私自身が考えました。就労移行支援事業所で本来拡大していこうと思ってたんですけれども、子ども分野のほうを広げようということで、放課後デイのほうの事業を3店舗やってるという感じになります	働きたくても働けない障害者の方たちに対して　小さな頃から子どもたちが過ごしやすい環境だったり、過ごしやすい方法であったりっていうのを身に付けていくことが、大人になったとき重要なのかなというところ	就労の時に必要なスキルの準備　小さい時からスキルを身に着ける環境	就労に必要なスキルの準備	就労に必要なスキルは、小さいころから身に着けていくことが必要	子どものころから、学齢後の未来を見据えた支援の現状は？
28	施設B	一気通貫という表現で、療育から就労までお支えしますということはうたわせていただいてる。最初は大人から始めて、今、まさに未就学児の子たちやって。中高生とかスポーンと抜けてるので。そこは新たに今後開発をしなければいけないところだとは思っている。おしなべたように、幼少期から成人になるまでおけき合いできたらいいなというのと。一方で、私たちが囲い込みをするようなことはしたくないなと思っているので。モデルとして、小さな頃から療育を受けて生きづらさを解消して、大人になっていくっていうモデルを提示していきたいなっていうほうが強いですね。決して私たちでなくてもいいと思っている。	一気通貫という表現で、療育から就労までお支えしますということはうたわせていただいてる　最初は大人から始めて、今、まさに未就学児の子たちやって。中高生とかスポーンと抜けてるので。そこは新たに今後開発をしなければいけないところだとは思っている　幼少期から成人になるまでお付き合いできたらいいな　囲い込みをするようなことはしたくない	療育から就支援までの一貫した支援	療育から就支援までの一貫した支援	一貫した支援の必要性	幼児期から成人になるまでの一貫した支援についてのモデルはあるか？
9	施設C	以前、働いていた、最初に働いていた社会福祉法人の保護者さんがNPOとして放課後を立ち上げるということだったので、責任者でやってもらえないだろうかっていうことで、そこで立ち上げに加わりました。	立ち上げに加わったのがきっかけ	前職の経験がきっかけ			
12	施設C	その分、NPOだと寄付っていうのが許されるので、補助金も出るので、本当はNPOが最善なんですが、ただそれよりも一刻も早く立ち上げて、この放課後、自分が思う、目指す、放課後っていうのを早く立ち上げたいというところで株式を選択しました。	一刻も早く立ち上げて、この放課後、自分が思う、目指す、放課後っていうのを早く立ち上げたい	運営の理念のある放課後デイの設立	運営の理念	経営者に左右されない一貫したサービスの提供	サービスに影響する経営的な問題は何か。サービスを提供する側での共通点はなにか？それによって設立地域に偏りが見られないのか
15	施設C	やはり、障害を持つ子どもたちとかの、長く将来を見据えて支援していかなきゃいけないので、長い時間をかけて統一した支援っていうのを目指していかなきゃいけないのに、そこでトップが変わったことでコロコロ変わる支援って、どうなのかっていうことで、株式会社にしたことによって、それは保たれるのかなと思います。	障害を持つ子どもたちとかの、長く将来を見据えて支援していかなきゃいけないので、長い時間をかけて統一した支援っていうのを目指していかなきゃいけない	未来を見据えた支援　長い時間をかけた統一した支援	継続した支援	統一した支援を長時間かけて行う必要性	
11	施設D	〇〇が代表の、いわゆる法人格がないグループでの活動が最初です。もともとは、法人格がないグループでの活動が最初っていう形で開設してます。	法人格がないグループでの活動が最初 法人格がないグループでの活動が最初 全く自費のサービス レスパイト	個人での立ち上げ			
	施設D	基本的にはデイというか、お預かりですかね、と、宿泊。全く自費のサービスです。それをT区の〇丁目のほうで始めています。発端は、実は設立者のほうは、病院でケースワーカーみたいな形で仕事をしていたんですけども、その中で、障害者を1カ月に1回って言ってたかな、その頃は。みんなを、いったん1日お預かりして活動しているようなことをしてたんですね。それはご家族の、ちょっと休息を取ってもらうっていうことが目的の一つにあって。今で言うレスパイトになるんですかね。そういうところある程度、目的とした活動を実はしていたんです。	ケースワーカーみたいな形で仕事をしていたんですけども、その中で、障害者を1カ月に1回って言ってたかな、その頃は。みんなを、いったん1日お預かりして活動しているようなことをしてた　全く自費のサービス レスパイト	一日過ごす場所の提供の必要性	在宅の障害者の過ごす場所とレスパイト	在宅障害者の過ごす場所の提供とレスパイトのニーズがあった	
40	施設D	A－　当然この頃から子どもたち、いたんですよ、もちろん。あんまり多くはなかったとは思うんですけど。どうしても、かなり困難ケースの場合は、そういう小さい子たちも預かるケースはやっぱりあって、やってたんですけど。	この頃から子どもたち、いた　　かなり困難ケースの場合は、そういう小さい子たちも預かるケースはやっぱりあって	法制化前から放課後のためのサービスを開始	開設当初から、小さい子どもたちのニーズがあった	子どもたちのニーズは、当初からあったが、家族がみることがあたりまえの時代だった	
	施設D	実際に、この設立の後に、4年ぐらい後かな数室を始めてるんですね。そこは遊びのための塾じゃないですけど、障害者のための、放課後とか(＃＃＃＃@00:10:59)が終わった後の余暇活動としてプログラムしたんです。これがいつだっけな、92年かな、91年かな。全くこれも、そんな制度ないので、自費の。	放課後とか終わった後の余暇活動としてプログラム	放課後の活動の提供	放課後の活動の場の提供	放課後の遊び、余暇活動の場の提供	
43	施設D	その間、精神も一応、少しやってたりはするんですけど。初め、自費の、全くデイサービスのな、何、完全に、言えば、時間扱いみたいな感じのところから少し、日中の通所の先(＃＃＃＃@00:13:26)っていって。	国の制度が乗っかってきたとこですね。そこを機に、ちょうど同じタイミングで児童デイサービスっていう事業が、児童福祉法のほうで設立されたのが、放課後等デイサービスのきっかけ	放課後等デイもできたときに現行のサービスを移行した	放課後等デイもできたときに現行のサービスを移行した		
	施設D	国の制度から言えば、その2003年のところでは、今まで通所訓練っていわれてた事業は、補助金もらってやってる形から、いよいよ契約っていう形になって。個人の契約になって、国の制度が乗っかってきたとこですね。そこを機に、ちょうど同じタイミングで児童デイサービスっていう事業が、児童福祉法のほうで設立されたのが、放課後等デイサービスのきっかけというか。そこが始まりですかね。	児童デイサービスっていう事業が、児童福祉法のほうで設立されたのが、放課後等デイサービスのきっかけ	児童福祉法での設立	法制度	法制度がとどのって、以前から行っていたサービスを法制度にのっとった事業に移行した	
44	施設D	どっちかっていうと、それまでは障害児のほうは、学校までは何とかなったけど、その後っていうのは特にないし。学校という、その頃、養護学校とかっていわれる所があって、そこが要は、うちが見るよっていう形には、形的にはなってますから、その後っていうのは特にサービス、何もないのが普通だったのかな。	障害児のほうは、学校までは何とかなったけど、その後っていうのは特にない　療育という意味合いよりは預かりに近いのかな、制度的にはね。そういうのがようやくできてきたので、それに乗っかった	最初は、療育の意味合いよりも預かりに近かった	療育の意味と預かりの意味	療育の意味と預かりの意味と両方の意味がある	
45	施設D	いろんなプログラムに通ってきてる小さい子たちもいましたんで、そういう子たちが、要は制度を使ってできればという形で、児童デイサービスという形で2003年の4月から、制度が始まった段階ですぐにやり始めましたね。	〇〇ていう、いろんなプログラムに通ってきてる小さい子たちもいましたんで、そういう子たちが、要は制度を使ってできればという形で、児童デイサービスという形で2003年の4月から、制度が始まった段階ですぐにやり始めました	小さい子たちのニーズ	児童デイサービスでのサービス		
	施設D	他の所とちょっと違う形でやってたんですね。そういうことで、結構ニーズが多くて。申し込みが多くて、本当に抽選になるぐらいだったんですけど、だんだん他にデイサービスができてきて、お母さんたちもだんだん若いかたがたに、お母さんがたもなってきて、思想そのものというか考え方自体が、もう預かってくれればいいという親のかたがたも結構増えてきていらっしゃるんですよ。ですから、そういう特徴があっても、ただ自分が仕事に行くから、ここからこの時間の間を、ただ預かってくれればいいですよというかたがた、結構増えてらっしゃって。	他の所とちょっと違う形でやってたんですね。そういうことで、結構ニーズが多く　　思想そのものというか考え方自体が、もう預かってくれればいいという親のかたがたも結構増えてきていらっしゃる	ニーズの変化	設立当時からの社会的な情勢の変化　仕事をしている親の増加	設立当時からの社会的な情勢の変化で、保護者が働いている間に預ける場所としてのニーズが増えてきた。	

ストーリー・ライン	1人でずごすことが出来ても、放課後にお友達との交流で社会性を育てる機会がないという、自身の体験からから他の子ども達への思いにつながった。学校以外の社会性を身につける場と学校卒業後の就労の選択肢を増やすこと、（就労支援事業を行う中で）社会性に必要なスキルは小さいころから身に着けていくことの必要性から就職など将来を見据えたスキルの支援が必要である。　どもたちのニーズは、放課後デイが制度化される以前からあり、活動の場の提供をしてきたが、法制度が整ってきてから、保護者の就労支援のニーズも増えた。子どもたちには、将来を見据えた一貫した支援が必要である。
理論記述	放課後デイの設立者の思いは、学校以外の社会性を身に着ける場と学校を卒業した後を見据えた、一貫した支援の必要性にある。一方、重度の障害を持つ子どもたちのレスパイト的な家族支援、家族の就労支援の役割がある。
さらに追究すべき点・課題	放課後デイ、一般の学童保育、児童デイを利用するときの選択の基準はどこにあるのか、学童保育クラブよりも閉所時間が早い時、保護者の就労支援やレスパイトとしての役割はどこが担っているのか？

2019.3.26

SCAT WEB site からのダウンロードフォーム scatform1.xls

http://www.educa.nagoya-u.ac.jp/~otani/scat/scatform1.xls

Table 3　Facility A

番号	発話者	テクスト	<1>テクスト中の注目すべき語句	<2>テクスト中の語句の言いかえ	<3>左を説明するようなテクスト外の概念	<4>テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）	<5>疑問・課題
8	施設A	もう週に1日でもいいから取りあえず、来ておいて、枠が空き次第入れてみたいな子も。	週に1日でもいいから取りあえず、来ておいて、枠が空き次第入れてみたいな子	毎日通所できなくても、ここが良くて待機している子どもがいる	放課後デイにも待機	待機児童がいる現実	放課後デイを子ども（保護者）が選定する理由には、どのようあ項目があるか
14	施設A	近隣は一番多い。比率でいったら違い子はそんな珍しいっていうか、数は少ないですけど。まんべんない感じですかね。	近隣は一番多い	近隣	利用児の分布・利用範囲	利用範囲は決まっていない	距離的な観点は放課後デイを選択する理由になっているか？
17	施設A	今、徒歩で通所している子、2人しかいないんですよ5時、6時でも歩いても問題ないなっていう子が2人しかいないっていうことなんですけど。あと歩けるだろうけど、もう電車じゃなきゃ通えないっていう子たちばっかで、そこまでになっちゃうと親御さんが、近くの放デイを探すぐらいのレベルになっていっちゃうと思うんですよ	徒歩で通所している子、2人しかいない。	通所手段	電車でしか通えない距離	自宅からの距離は自力通所できる子どもは少ない	
	施設A	本当に通園んだら隣区なんですけど。でも片道、20から25分くらい。それも鉄道網のほうに行くと、遠がえない混むんですよ。だから、混まないで行けちゃったら20分で行けるものを、結局、大通り出て渋滞にはまると30分かかっちゃうみたいな感じの距離なので、結構距離あるんじゃないかと思うんですよね。30分とかになっていっちゃうと。だから1区の子が多いんですけど、うち1区が区境なので、この辺のT区民の子が少ないって感じですかね。	渋滞にはまると30分かかっちゃうみたいな感じの距離なので、結構距離あるんじゃないかと思う　区境なので、この辺のT区民の子が少ないって感じですかね。	交通事情による送迎時間の長さ	交通事情が送迎時間に影響する	幹線道路の混雑により、送迎地域が偏ることもある	
42	施設A	5年なので。まだですね。今、重身がこっち側で高校1年生が一番大きいですね。向こうだと中2なので。（注　「向こう」は「施設A-1)	五年　高校一年生が一番大きい	設立から数年	法制化後の放課後デイ	放課後デイ法制化後10年で放課後デイを高校3年生まえ過ごす子はこれからでてくる可能性	卒業した子の数、転帰は？これから予測される問題は？
49	施設A	やっぱり高3までじゃないですか。でも本当は思いとしては、早く譲ってあげたいんですよ。それこそもっと必要な子ってたくさんいて、うちも多い曜日だと12名ぐらいのキャンセル待ちになってるので。	本当は思いとしては、早く譲ってあげたいんですよ。それこそもっと必要な子ってたくさんいて、うちも多い曜日だと12名ぐらいのキャンセル待ちになってる	サービスが必要な子はたくさんいる	必用な子へのサービス提供量の確保できていない現実	放課後デイを必要としている子どもたちには「、知的障害・発達障害の重度のお子さんと、普通級を利用できるお子さんがいる	学童クラブを利用する子どもたちは、放課後デイサービスとどういう基準で選択しているのか
50	施設A	水曜日が一番多いんですけど。下校が早いんですよね。水曜日って。だから水曜日を利用したいっていう保護者さんが多くて。。だからそういうので、もっと必要性の高い子がたくさんいるのに、子どもたちは環境は変化したくないですよね。なかなか迷います。小学校6年生から中1に上がるときに、	水曜日が一番多いんですけど。下校が早い、水曜日を利用したいっていう保護者さんが多い	放課後の時間が長い時、利用希望が多い	放課後の長い時間を自宅で過ごすことの困難か保護者の就労時間のため	親の時間確保の必要性、ニーズがある	親の就労支援になっているのか？親の時間の確保のためか？
	施設A	だからそういうので、もっと必要性の高い子がたくさんいるのに、子どもたちは環境は変化したくないですよね。なかなか迷います。小学校6年生から中1に上がるときに、	必要性の高い子がたくさんいるのに、子どもたちは環境は変化したくない	必要性の高い子ども　環境を変化させたくない子ども	必要性の高い子ども環境を変化させたくない子ども	放課後デイの必要性の高い子どもが利用できない現状と、放課後デイ以外の場で過ごすことのできる能力がある子供も慣れた環境が良いといういニーズがある	
51	施設A	支援学校のお子さんはもうしょうがないと思うんですけど。それこそ支援学級だったり、通級の子だったりとかの軽度の支援の子だったら、もう卒業したらっていう思いもあるんですけど、中学に上がるとかいう環境下で、気持ちを分かってほしいところを作っておかないと、怖いのかなって。1人、この間、中1に上がった男の子が、通級の子なんですね。普通級に通っている通級の子なんですけど、4月のときに本人が私に学校でいじめられても、ママには言えなくてもAで話すからって話してくれたんです。なかなか、お母さん、お父さんに話ずらいっていうか、心、だんだん思春期になってまて言えない、言いずらいっていう環境があっても、しゃべって、相談しようと思う大人がいるっていうのはすごい大事なことだと思って。本来だったら、もう自立できるんですよ。できるけど、ちょっと趣旨が変わっちゃってるなっていうのも、最近、思ったりもしますね。	支援学級だったり、通級の子だったりとかの軽度の支援の子だったら、もう卒業したらっていう思いもある、中学に上がるとかいう環境下で、気持ちを分かってほしいところを作っておかないと、怖いのかな、ママには言えなくてもAで話すからって話してくれた、。本来だったら、もう自立できる	普通校の子どもたち　家族以外に気持ちの受けとめる	普通校の子どもたちの支援・相談の場の必要性	放課後デイ以外で、思春期に入った子供が相談ができる場所の必要性	
52	施設A	本来は放課後等デイサービスって、障がいの子たちの学童じゃないですけど、療育の場なのに、それっていうのは、教育センターだったりとか、そういう場がやるきなんじゃないのかなっていうのは、すごく感じます。毎日のように、放課後、それこそ学童のように来ていたからの信頼関係が当然できているので、小学校からの。それを持っているからこそ、普通級に入ってても、ピピらずいれているというところもあるのは分かるんですね。見てて。だからもうお母さんにそろそろ卒業っていうのは、なんか言い難くって、本人を見ていると。ちょっとそういう、むしろそういう中間地点の施設があれば、もうちょっとそれこそ小学校1年生、こう入る1年生の子たちの受け皿も、もうちょっとできるのになっていうのは思います。今もう、本当日々毎日のように問い合わせありますよ。来年1年生なんですっていう連絡が、本当に毎日のようにあります。でも、うちは、9番待ち、10番待ちなんですって。でも何年先か分かりませんっていう状況なので。ちょっと違うんじゃないかなという気持ちにもなります。そこら辺をどう、今いる子たちをどう卒業させて、本来の受け皿を作っていって、回転良くさせていくじゃないですけど、そのほうが大事なのか、どうなのかなっていう思いですね。今。	本来は放課後等デイサービスって、障がいの子たちの学童じゃないですけど、療育の場、本来は放課後等デイサービスって、障がいの子たちの学童じゃないですけど、療育の場、今いる子たちをどう卒業させて、本来の受け皿を作っていって、回転良くさせていくじゃないですけど、そのほうが大事なのか、どうなのかなっていう思い	療育の場としての放課後デイ放課後デイの卒業	療育の場としての放課後デイ	障害のある子どもたちの療育の場として、必要な子どもたちにサービスを提供し、卒業できる子どもたちは、卒業させて必要な子どもたちにサービスを提供できることが大切	放課後デイの療育としての役目は何か、卒業後の行き先はどこか？卒業して、学童、塾などで過ごすことが出来ているか、そこでの支援はあるか？
53	質問者	小学校入る前にもう、問い合わせがあるっていうことは、もう普通の学童だとちょっと。					
55	施設A	ちょっときついのかなって、お母さんたちがもう、お父さん、お母さんがもう・・・。	きついのかなって、お母さんたちがもう、お父さん、お母さんがもう	保護者の負担	保護者の負担	学齢期前から保護者の負担は大きい	
68	施設A	未就学の子で見学に来たお母さん、ちょっと重かったんですけど。知的度合いが、すっごい重かった。発言それこそなくっていう子だったんであれだったんですけど。児童発達支援行ってて、そこから放デイの話が出るじゃないですか。それで言ってました。	未就学の見学に来た子知的度合いが重かった子は児童発達支援で話がでた	児童発達支援	（背景）児童発達支援の利用（結果）放課後デイを紹介される		
70	施設A	勧められてっていう感じ。でも勧められても、どこも受けてもらえなきゃ。	勧められても、どこも受けてもらえなきゃ、そのお母さんも4個も5個も見て、全部今、いっぱいでって言ってました		（背景）断られる（結果）複数見学		
		そのお母さんも4個も5個も見て、全部今、いっぱいでって言ってました。	全部　今いっぱいで	複数の施設を見学	障害の軽重で断られているのではないかという疑問がある	複数見学をしても、利用が決まらない時もある	障害が重いと受け入れが出来ない施設があるのではないか？
72	施設A	空いてるって言われたのに、うちの子、多分、見てからか判断どうなのか分からないけど、やっぱり空いてなかったですって言われたこともあるって言われたんですよ。多動で、発言もないし。棚の上に乗っかってるものは、全部ワーって、ひっくり返されて、1人のチがおびえちゃってお母さんは、すごい恐縮がってて。連れて行くたびに、お母さん、こんなふうに謝罪して、見学しているんだなと思いました	空いてるって言われたのに、うちの子、多分、見てから判断どうなのか分からないけど、やっぱり空いてなかったですって言われたこともある、連れて行くたびに、お母さん、こんなふうに謝罪して、見学しているんだなと思いました	重度のお子さん受け入れることの困難　保護者の思い	（原因）障害が重度（結果）利用できない	放課後デイの事業所の受け入れ態勢によりお子さんを受け入れられないことがある	放課後デイがお子さんの利用を受けられないときの問題は、定員、職員の人員配置などの人的環境、施設設備の物理的環境のどこにあるのか？
73	施設A	本来の在り方は、そういう子を受けてあげないといけないじゃないですか。だから、今、放デイ側がいっぱいなので、選ぶ、事業所が利用者を選んじゃっているというところもあるんだろうなっていうのは感じました。	こういう子が受け皿として必須なのに、断る。事業所が利用者を選んじゃっているというところもあるんだろうな	事業所側の受入れ体制	子どもの状態（結果）事業者が利用児を選ぶ		

ストーリー・ライン	待機児童がいる。利用範囲は決まっていないので、自宅からの距離は自力通所できる子どもは少ない現状である。送迎車の利用は可能だが、地域的に道路状況がわるい経路もあり、送迎時間を考えると送迎地域が偏ることもある。開所後数年なので放課後デイで高校3年生まで過ごすこともが出てくるのはこれからである。利用している中で、放課後デイ以外の場所で過ごす能力がついてきても、思春期の子どもたちの中には、慣れたスタッフのいる放課後デイの利用が良いと選択する子どももいる。複数見学をしても利用が決まらないときがあるという話も聞いていて、放課後デイの事業所の受入態勢によりお子さんを受け入れられないことがあるだろう。
理論記述	利用範囲は決まっておらず、地域の道路状況では、送迎に時間がかかる。待機児童がいる要因の一つは、放課後デイ以外で過ごす能力が付いてきた高学年の子どもたちでも、放課後デイで過ごすことを選択し、新たな子どもを受入れられないことである。
さらに追究すべき点・課題	障害児対象の学童保育の歴史をみると、「地域で暮らす」というキーワードが出てくる。送迎車が必用且つ、送迎車で30分以上かかる、居住地域から遠い地域での放課後デイは、地域で暮らすという点では意義から離れるのではないか？距離的な制限、学区の制限は必要ないのか。または、事業所の経営的な観点からの地域的偏りは是正しなくてよいか？潜在的にどのくらい、放課後デイの利用先の決定に困難を感じているかは不明である。

2019.3.26

SCAT WEB site からのダウンロードフォーム scatform1.xls
http://www.educa.nagoya-u.ac.jp/~otani/scat/scatform1.xls

Table 4　Facility B

番号	発話者	テクスト	<1>テクスト中の注目すべき語句	<2>テクスト中の語句の言いかえ	<3>左を説明するようなテクスト外の概念	<4>テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）	<5>疑問・課題
43	施設B	基本的な利用ペースは週に1回。週に2回使ってる方もほとんどいらっしゃらない、割り振りりに枠が定まってるので。週2回、3回というご利用は今はご遠慮いただいてるような形になりますね。	基本的な利用ペースは週に1回　週2回、3回というご利用は今はご遠慮いただいてる	利用制限がある？	決まったプログラムがある	プログラムが決まっているので、利用は週1回で枠が埋まる	スポットで来ている子どもは、利用日以外の放課後を
44	質問者	子どもたちは、他の日っていうのは他のデイサービスに行ったりしているのでしょうか					
45	施設B	認定がお子さまによっては月に5日の方もいらっしゃいますし、月10日の方もいらっしゃるので。状況として日数をたくさん持ってらっしゃる方は、うち以外とも多分、ご契約をされてらっしゃると思いますが。特に私どもは、中軽度の方たちが多いので。あまり日数出てこないんですね。どうしても重度の方のが日数が多く出てくるんで。そういうの、大体5日から10日ぐらいになりますかね。うちの所の平均の契約日数は、月8日が全体の平均なので。週2回使えることが理想みたいな形なんですけれども。	支給決定　日数をたくさん持ってらっしゃる方は、うち以外とも多分、ご契約をされてらっしゃると思います　平均の契約日数は、月8日が全体の平均	支給決定により利用日数がきまる　中軽度のこどもたち、日数5日から１０日	区分による利用制限	障害が軽度・中等度の子どもたちは、毎日通うだけの支給区分がない	利用日以外の子どもたちの過ごし方は？
53	施設B	小学生までという形で区切らさせていただいてるので、ご利用は小学生までです。	小学生まで	利用学年は小学生まで	放課後等デイサービス	学齢前も受け入れているため、児童発達支援事業を併設	
57	施設B	私たちがサービスをつくるときのコンセプトが、いわゆるお預かりはしないと。お預かり型のデイサービスじゃなくて、あくまでも目的を持って成果を出すためのサービスとしての給付を使うべきだというふうに考えがあるので。	お預かり型のデイサービスじゃなくて、あくまでも目的を持って成果を出すためのサービスとしての給付を使うべきだというふうに考えがある	目的をもった一時間半のプログラム	原因　目的を発揮視させて成果を出すため　結果一時間半のプログラム	子ども達の就労という将来を考えたときに、子どもたち自身が過ごしやすい環境、スキルを身に着けるために目的を絞った結果、限定したプログラムを	利用日以外の放課後をどう過ごしているか
	施設B	ご利用の方で1時間半しか使えないんですかっていう、見学や体験の際に言われる方もいらっしゃいます。	1時間半しか使えないんですか	利用時間	利用時間が短いと、利用者とのニーズの不一致	プログラムのニーズと毎日の放課後を過ごす場としてのニーズがある	
58		Ｂ－　送迎は、事業としてはやってないということですか？					
63	施設B	7割ぐらいは自力で来てます。あとの3割の方が、親御さんと一緒に来たりだとか、移動支援のヘルパーさんを使ったり。ただ、移動支援自体があまり社会支援として多くないので、使ってる方はレアかなと思いますけれでも。でも、7対3ぐらいの割	割ぐらいは自力で来てます。あとの3割の方が、親御さんと一緒に来たりだとか、移動支援のヘルパーさん	自力通所が7割	自分で通所できる能力のある子どもたち	自力通所できる能力のある子どもたち	自力通所できる距離的時間的な範囲はどのくらいか？
68	施設B	区境の子たちが来ている。電車とか利用する子もいる、バス。	区境の子たちが来ている。電車とか利用する子もいる	区境、電車バスの利用	公共交通機関を利用できる子どもたち	自力通所する子どもたちは、公共交通機関の利用もできる	
71	施設B	親御さんと一緒に見に来ていただいた中、もしくは親御さん単独で見に来ていただいて、これからサーキットでトレーニングをするんですけど。そのサーキットのトレーニングに対応ができるか否か。もちろん、そのお子さまの特性であったり、並べないとか待てないとかっていうことは別として、そもそも、運動できる身体能力があるのか。いうところがメインなので。知的レベルでお断りをするというよりかは、どちらかというと身体機能のほうが判断基準といいましょうか、そこでお母さんたちに、これ取り組めますかということを判断いただいてるという形になりますね。なんで、重度の、強度の自閉傾向がある子たちでも、運動ができるなら別に。あとは、社会性は一緒にこのトレーニングの中で身に付けていきましょうというような(＃＃＃＃@00:20:59)になってます。	運動できる身体能力があるのか。いうところがメイン　身体機能のほうが判断基準　強度の自閉傾向がある子たちでも、運動ができるなら別に。あとは、社会性は一緒にこのトレーニングの中で身に付けていきましょう	社会性をトレーニングすることがメイン	運動機能では、制限が出るが、そのほかの制限はない	利用児の身体機能的な制限はあるが、プログラムの目的が、一つに明確化している	利用日以外の放課後をどう過ごしているか　そこでの過ごし方と、本放課後デイでの効果
76	質問者	Ｂ－　コミュニケーション、言葉が出ないような子たちもいます？					
77	施設B	場合によっては。どちらかというと、未就学児のほうがその傾向が強い。親御さんも一緒にいらっしゃるのでというのがあると思いますけど。小学生になってくると、送迎をしていないので、おのずから自分で通えないっていうふうになってくると、親御さんが一緒に来るかヘルパーさんご用意いただくかができない方は、他の療育さんのほうがいいですよっていうことは、それは心苦しいんですが、ご提案をさせていただくようにはなると思います。	小学生になってくると、送迎をしていないので、おのずから自分で通えないっていうふうになってくると、親御さんが一緒に来るかヘルパーさんご用意いただくかができない方は、他の療育さんのほうがいいですよっていうことは、それは心苦しいんですが、ご提案				
78	質問者	そうすると、自然に少し、自分の身の回りのことはできるぐらいの環事都度のこどもたちですか					
79	施設B	ある程度の自立度がある子たちが集まりやすいっていう形になっている。	ある程度の自立度がある子たちが集まりやすい			送迎をしないこと、プログラムが決まっていること、時間が短いことで、	放課後を過ごす場としての放課後デイの目的は？
57	施設B	私たちがサービスをつくるときのコンセプトが、いわゆるお預かりはしないと。お預かり型のデイサービスじゃなくて、あくまでも目的を持って成果を出すためのサービスとしての給付を使うべきだというふうに考えがあるので	コンセプトが、いわゆるお預かりはしないと。お預かり型のデイサービスじゃなくて、あくまでも目的を持って成果を出すためのサービスとしての給付を使うべきだというふうに考えがある　1時間半	目的をもった一時間半のプログラム	原因　目的を発揮視させて成果を出すため　結果一時間半のプログラム	子ども達の就労という将来を考えたときに、子どもたち自身が過ごしやすい環境、スキルを身に着けるために目的を絞った結果、限定したプログラムを展開している	利用日以外の放課後をどう過ごしているか　そこでの過ごし方
	施設B	ご利用の方で1時間半しか使えないんですかっていう、見学や体験の際に言われる方もいらっしゃいます。それは、うちとしてはこのプログラムでやってますのでということで、ご理解をいただいてるようなところですね。	1時間半しか使えないんですか	利用時間	利用時間が短いと、子どもや保護者のニーズに合わないこともある	限定したプログラムに対してのニーズと毎日の放課後を過ごす日常の場としてのニーズがある	
71		基本的に、お問い合わせいただいた方で必ず見学と体験を絶対マストでしていただいてるんですね。親御さんと一緒に見に来ていただいた中、もしくは親御さん単独で見に来ていただいて、これからサーキットでトレーニングをするんですけど。そのサーキットのトレーニングに対応ができるか否か。もちろん、そのお子さまの特性であったり、並べないとか待てないとかっていうことは別として、そもそも、運動できる身体能力があるのか。いうところがメインなので。知的レベルでお断りをするというよりかは、どちらかというと身体機能のほうが判断基準といいましょうか、そこでお母さんたちに、これ取り組めますかということを判断いただいてるという形になりますね。なんで、重度の、強度の自閉傾向がある子たちでも、運動ができるなら別に。あとは、社会性は一緒にこのトレーニングの中で身に付けていきましょうというような(＃＃＃＃@00:20:59)になってます。	必ず見学と体験を絶対マスト　運動できる身体能力があるのか。いうところがメイン　身体機能のほうが判断基準　強度の自閉傾向がある子たちでも、運動ができるなら別に。あとは、社会性は一緒にこのトレーニングの中で身に付けていきましょう	社会性をトレーニングすることがメイン	運動機能では、制限が出るが、そのほかの制限はない	利用児の身体機能的な制限はあるが、プログラムの目的が、一つに明確化している	利用日以外の放課後をどう過ごしているか　そこでの過ごし方と、放課後デイでの効果

ストーリー・ライン	プログラムが決まっているので、利用は週1回で枠が埋まる　プログラム内容に身体的な制限があるが、プログラムが決まっていること、一回の利用時間が短いこと、送迎がなく自力通所が必要なことで、障害が軽度・中等度の子どもたちが対象になっている。プログラムは、将来の就労を見据えて、子どもたち自身が自分が過ごしやすい環境・スキルを身に着けるための展開し、限定したプログラムをとおして、社会性なども身に着けるように支援する。利用希望の子どもたちの中には、毎日の放課後を過ごす場としてのニーズも聞かれることがある。
理論記述	子どもたちの障害の程度がある程度そろうことで、子どもたち自身が過ごしやすい環境や、集団での生活のスキルをみにつけるという限定した目的をもった集団プログラムが組みやすく、療育の目的を明確に示しやすい。目的が明確になったプログラムのニーズがある一方で、毎日を過ごす場としてのニーズも聞かれる。
さらに追究すべき点・課題	利用日以外の放課後をどのように（どこで、誰と）過ごしているか。自力通所できる距離的時間的な範囲はどのくらいか？

2019.3.26SCAT WEB site からのダウンロードフォーム scatform1.xls　http://www.educa.nagoya-u.ac.jp/~otani/scat/scatform1.xls

Table 5　Facility C

番号	発話者	テクスト	<1>テクスト中の注目すべき語句	<2>テクスト中の語句の言いかえ	<3>左を説明するようなテクスト外の概念	<4>テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）	<5>疑問・課題
190	施設C	高校3年生まで。うちは、でも、高校生は1人だけですので、あんまり高学年はいないです。少ないですね。中学年から低学年が、圧倒的に多いです。	高学年は少ない　中学年から低学年が多い	放課後デイの対象年齢は広いが、A放課後デイを来所する子どもの実際は年齢層が低い	小学生が多い	対象年齢は小学生が多い	小学生の子どもと高校生の子どもの放課後の課題に相違はないのか
192	施設C	中には、やっぱり、高学年になって。軽度のお子さんとかは、もうだいぶ、自分の気持ちも伝えられるようになったと。今度は学校と勉強のほうの塾で頑張りますっていう形で辞めていくお子さんもいらっしゃいます。あとは単純にお引っ越しだったりとか、あとはあれですね。利用日数を増やしたいので、うちが、もう今、満杯なので、もっと利用日数が増える所、増やせる所を見つけたので、辞めますとかっていう方もいらっしゃいますね。	高学年になって軽度のお子さん、自分の気持ちを伝えられるようになった　学校と塾で頑張る　利用日数が増やせるところ	放課後デイを辞める理由　自分の気持ちを伝えることが出来ようになること　利用日数を増やしたい	子どもの力と放課後デイの受け入れ態勢	自分の気持ちを伝えられる力がつくことで、放課後デイ以外に活動の場を増やすことができる　放課後デイ事業所側の受入の問題で、子どもの希望する利用日数が不足することがある	
195	施設C	5名強ぐらいですかね。もう「待ちをされている間にも決まったら、そちらに行ってください」っていうふうにお伝えしてあるので、一応、もう契約で待ちの方は2名、もう「確実にもう契約します」って言っている方が2名ぐらいで、あと3, 4名は、ちょっと他も探してみてっていう感じですね。	まちされている間に決まったらそちらに行ってくださいってお伝えしてある	待機児童	待機のなかには、この施設を利用したいと待っている方と、他も探してい空いているほうに行く方がいる	利用者も施設を選んで、お子さんに良いところを選ぶ。空いている放課後デイを探していく方もいる	
212	施設C	もちろん、軽度のお子さんが学習支援の放課後さんと、要は、運動系、スポーツ系の体を動かす放課後さんと、うちっていう。ちょっと自由に好きなことができるっていう放課後さんを選択している子もいますし、あとは、やっぱり、うちが水曜日、どうしても視覚の子たちと、あと日曜日もやってないので、そこを埋めたいから他の所に行っているっていう方もいらっしゃいますし、そこは、まちまちで。	軽度のお子さん　学習支援の放課後デイ、運動系スポーツ系、水曜日が視覚のこたち、日曜日閉所	利用目的（放課後デイの活動の特徴で選ぶ）日曜に利用の希望	他の放課後の場を利用できる子は、選択肢の一つとしての放課後デイを利用、日曜日の利用希望もある	放課後デイのプログラムでの選択と曜日での選択	
226	施設C	診断名は付いていないんですけどっていうお子さんが、約1名だけですね。あとは、皆さん、付いていますね。	診断名は付いていないんですけどっていうお子さんが、約1名だけですね。あとは、皆さん、付いていますね。	診断を受けている子が利用	診断を受けて居る子どもが利用	診断を受けているお子さんと受けていないお子さんがいる	
237	施設C	学童クラブを利用していたんだけど、学童クラブよりは放課後がいいっていうことで移動されてきたお子さんもいますし、そこを利用しながら、うちもっていう方もいますね。	学童クラブがいい　そこを利用しながらうちも	学童クラブと放課後デイの利用		学童クラブを利用していても、放課後デイを選択する子どもがいる	
238	質問者	利用している方も。学童クラブさんと放課後さんだと子どもたちって、どういう区別でりようしているのですか					
239	施設C	ただ、学年が上がってきたり、ちょっとその中で嫌なことがあるとみんな行きたくなくなっちゃうんですね。学童、どうしても。	学年が上がってきたり、ちょっとその中で嫌なことがあるとみんな行きたくなくなっちゃうんですね。	学童を利用していた子どもたちがいかなくなる理由	学童を利用していた子どもたちがいかなくなる理由	学童クラブを利用していても、放課後デイを選択する子どもがいる	
	施設C	なので、なかなか、高学年になってくると、だんだん使わなくなってくるかなっていう感じですかね。遊び、何して遊んだのって聞くと職員さんといたよっていうことが多かったので、そのお子さんは。	職員さんといたよ	学童での過ごし方	学童での過ごし方	学童で大人と過ごす	
	施設C	他の子と一緒に関わりとかを持つのは、なかなか、やっぱり難しかったりするのかなとは思うんですけど。	他の子と一緒に関わりとかを持つのは、なかなか、やっぱり難しかったりするのかな	コミュニケーション能力	コミュニケーション能力	コミュニケーションに支援がいる子どもたちが学童クラブで過ごすときの困難感	
番号	発話者	テクスト	<1>テクスト中の注目すべき語句	<2>テクスト中の語句の言いかえ	<3>左を説明するようなテクスト外の概念	<4>テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）	<5>疑問・課題

ストーリー・ライン	自分たちの気持ちを伝えられる力が付くことで放課後デイ以外へ活動の場が広がる可能性がある。放課後デイの利用を希望する子どもたちには、利用日数が不足し、利用事業所を変更したり、複数の事業所を利用している。放課後での活動の内容や開設日で事業所を選んでいる。学童で大人と過ごすのは、コミュニケーションに支援がいる子どもたちにとって、学童保育クラブで過ごすときに困難感がある。
理論記述	コミュニケーション能力など、学年が上がるにつれて、放課後デイ以外の活動の広がりがみられる一方、学童保育クラブより放課後デイを選ぶこどもがいる。放課後等デイはその活動内容だけではなく、開所日も選択の基準になる。
さらに追究すべき点・課題	放課後デイを選択する子どもたちにとっての学童保育クラブと放課後デイでの環境の違いは何か。

2019.3.26SCAT WEB site からのダウンロードフォーム scatform1.xls　http://www.educa.nagoya-u.ac.jp/~otani/scat/scatform1.xls2019.3.26

後デイでの活動として，継続した一定のプログラムを組んでいるが，保護者のニーズとしては，プログラムと保護者の就労支援・レスパイトの意味もある。」とした。

4　考察

施設の設立時の思いからは，「社会性」と「一貫した支援」という思いがあり，療育の場として，学齢期以後に必要な社会性の獲得を見据えて支援をしているといえる。一方で，施設Dのように，放課後等デイサービスの設置以前から，障害者の在宅支援を行っていた事業所では，レスパイトとしての役割を担うことも大切な役割としており，放課後デイには，療育としての役割と家族支援の役割がある。家族支援は，レスパイトだけではなく，保護者の就労支援のニーズも増えていると推測される。しかし施設Dのテクストで「思想そのものというか考え方自体が，もう預かってくれればいいという親のかたがたも結構増えてきていらっしゃる」という言葉が聞かれている。家族が介護をするのが当たり前の時代から，社会的なサービス資源も増え，家族のQOL も大切にしていきたいという考え方に変化していることがうかがわれる。

4施設で，放課後デイの複数利用，学童保育クラブとの併用をする児童についてのテクストがみられる。施設 D のテクストにみられるように，「いろんな所で契約したほうが，いざとなったときにも困らない」セーフティネットのような役目をはたし，保護者の安心につながる。学童保育クラブとの併用の理由は，ほかに，放課後デイの利用日数の制限，希望した放課後デイの利用枠に空きがないなどが予測される。また，放課後デイの複数利用の理由は，放課後デイの利用枠に空きがないほか，利用時間が子どもとその家族のニーズに合わないこと，子どもの障害の状態により放課後デイ側に受け入れ態勢がないことが考えられる。本調査での4施設は徒歩圏内に隣接しており，子どもや家族がどのような理由で選択しているか，利用時間の希望などは明らかではない。今後，子どもたちと家族のニーズを明らかにしていくことが必要であり，利用を待機している子どもたちが希望のサービスを受けることが出来るように地区での必要数などを算出していくことも必要である。

Table 6　Facility D

番号	発語者	テクスト	<1>テクスト中の注目すべき語句	<2>テクスト中の語句の言いかえ	<3>左を説明するようなテクスト外の概念	<4>テーマ・領域概念（前後や全体の文脈を考慮して）	<5>疑問・課題
108	施設D	土曜日もやってた頃は、マックス60ぐらい。60人いた。1日1回、6日間。毎日人が違うっていう時期もあった。	登録人数60名いた	登録人数は多い時で定員の6倍	放課後等デイサービスが急増する前は、利用者が集中していた	放課後等デイサービスが急増する前は、利用者が集中していた	
110	施設D	うちも、なるべくなら一人の方を数日通して見れたほうが今はいいなと思ってるんで、なるべく抑えてはいる感じですかね。一番の要因は、やっぱ急激に増えて、いろんな所行く選択肢が増えたっていうのがそうですよね。	一人の方を数日通して見れたほうが今はいいなと思ってる　急激に増えて、いろんな所行く選択肢が増えた	放課後デイが増加して選択した増えた　1か所に通うメリット	継続して、支援出来たほうが良いが選択肢が増えて、一週間、毎日通所車が違うこともあった	同じ放課後デイを継続して利用するメリット	
115	施設D	月～木でやってます。一つは、始めた頃は、もうそれこそ、こんなやってる所なんかほとんどなくて、区内に一つ、二つとかっていうレベルだったんですけど、	始めたころは　こんなやってることろなんかほとんどなくて	サービス提供事業所の不足	サービス提供事業所の不足	放課後の支援をする事業所は不足していた	
118	施設D	急激に増えて。本当ここ5年ぐらいで、一気にぐわっと上がって、事業所の数がものすごい増えてって。じゃあ僕らは何をするっていう話を、なったときに、当初の目的の、要は就学児童に対するケアとかサポート等に関して言えば、今はどこでもできるんじゃないのかっていうのが一つの課題に挙がったんですね。その中で、じゃあうちとして何をしていこうかってなったときに、さっき言った、要するに一人の方をできるだけ回数来てもらって、通して見ていく。今、放課後等デイサービスなんて、療育っていうところがすごく力を入れてくれという指針なので。そんなの普通じゃないって、一瞬思うけど。今までやってこと考えたらね。でも、そういうところで、できるだけ一人の人が何回も来てもらって、○○のこと、家族ともやっぱり連携を深く取らなきゃいけないとは思ってるんですけど、	ここ5年ぐらいで、一気にぐわっと上がって、事業所の数がものすごい増えてじゃあ僕らは何をするっていう話　一人の方をできるだけ回数来てもらって、通して見ていく、できるだけ一人の人が何回も来てもらって、家族ともやっぱり連携を深く取らなきゃいけないとは思ってる	1人の人を通してみていくこと　家族と連携をとること	放課後デイのあとのこと	放課後デイの後のこと、卒業してしまったあとも夕方から夜の支援が必要であり、そのために、一人と家族を通して支援し連携していく必要がある	
		放課後デイサービス、実際、卒業しちゃうと、もうないんですよ。その代わるサービスっていうのがね。夕方から夜にかけての時間帯が空いちゃうんですね。	放課後デイを卒業しちゃうともうない　夕方から夜にかけての時間があいちゃう	放課後デイの対象年齢後のことを考えておく	放課後デイの対象年齢後のことを考えておく	学齢期以後にも、活動の場や、自宅以外の居場所は必要である	
119		うちはその点では、○○（余暇活動の場）っていうのは一応あって、余暇活動っていうところにも力入れてるので。そういう流れとしては、児童デイ、放課後等デイサービスで利用したかたがたをよく知って、本人たちも○○のことをよく知って、安心できる場もそうですけど、そういう子たちを、育てていくって言い方はちょっとおこがましいんですけど、ずっと見ていこうっていうのが基本的なところにはあって	余暇活動っていうところにも力入れてる　　安心できる場もそうですけど、そういう子たちを、育てていく　いろんな所で契約してったほうが、いざとなったときにも困らない	放課後デイ、児童デイをリようした人たちがその後のサービスにつながれる　ほかのデイサービスに登録するのも、いざというときに困らないのでよい	放課後デイのあとの支援と支援の継続、いざというときのセーフティーネットとしての複数事業所との契約	放課後と学齢期が終わったあとの活動の場とセーフティーネットは複数あったほうがよい	
		そんな中で、いろんな放課後等デイサービスに行き始めてる(＃＃＃＃@00:31:00)もいるので、それが僕はいいと思ってるんですね。いろんな所で契約してったほうが、いざとなったときにも困らないし。	放課後デイの複数利用	放課後デイの複数利用	セーフティーネット	自分の居場所が数か所あることで、セーフティーネットとなる	
120		定員自体はいっぱいなんですけど、こぢんまりした所で、今、4日間という形で、毎日違うプログラムをして。28人、今いるんですけど、多い人だと3回とか4回とか来れるような人もいるし、1回だけの人もいるし、少しでも複数日、利用できる人は増えてはいるのかな。	定員自体はいっぱいなんですけど、こぢんまりした所で、今、4日間という形　定員自体はいっぱいなんですけど、こぢんまりした所で、今、4日間という形	複数日利用できる人が増えている	4日間で1日少ないが、複数日利用できる人が増えている	学齢後のサービスも運営しながら、継続した支援のために、放課後デイの営業日を少なくしているが、複数日利用できるひとが増え、現念にあわせた運営をができている	
124		今、多分うちだけしか利用してないのは1人。うち金曜はやってないから、金曜どうしても他ん所行くって人もいるんですけど、本当にうちしか利用してないのは1人ぐらいですね。あとはみんな複数。多い人は3、4カ所。	多分うちだけしか利用してないのは1人	事業所の複数利用	事業所の複数利用	週一日平日閉所していることで、ほかの事業所を利用している	
129	施設D	ヒエジマ　先ほど言ったように、もう特徴(＃＃＃＃@00:33:05)ためにはどうしようということで、他の所ではやってない、デイサービスではやってないプログラムを行うということで、体操という、専門家を呼んで、そこで体操をして、身体的にも、それから精神的にも、知的にもいろいろと向上させるためのプログラム作ろう、ということから始まって。	他の所ではやってない、デイサービスではやってないプログラムを行うということで、体操という、専門家を呼んで、そこで体操をして、身体的にも、それから精神的にも、知的にもいろいろと向上させるためのプログラム	心身ともに向上させるプログラムのニーズ　お預かりのニーズ	ニーズの多様性	心身ともに向上させるプログラムでやってきたが、仕事に行くためのお預かりのニーズも増加している	
130	施設D	うちとのいろんなコミュニケーション、連絡をしたりするんですけど、それももう、あんまりおぼつかなくて。いろいろ問いかけても、返答、返ってこない。そうような親御の方もいらっしゃったりしてるんでね。そういうような変化もあったと思うんですが、ただ、うちの場合、そのプログラムに変化を付けてやってたんで、分かってる方は、そういうかたがたからのいろいろな話を聞いたりして、ぜひこちらにということで来られる方で。ほとんどは密接につながって、保護者の方と。で、継続してるって感じが多いです。だから先ほど言ったように、おおっぴらに広告もしないし、何もやってないんです。	そのプログラムに変化を付けてやってたんで、分かってる方は、そういうかたがたからのいろいろな話を聞いたりして、ぜひこちらにということで来られる方で。ほとんどは密接につながって、保護者の方と。で、継続してるって感じが多いです	プログラム内容のニーズ　口コミ	プログラムの特色が口コミでひろがって利用希望がある。利用継続もしている	保護者の方と密接に関係を築いて、継続して利用しているかがた多い	
132		一応、定員は満たして。しかも、こちらが意図する、要するに、同じ方を長く見たいということで、週2、3回お見えになられて。変化がよく見えるような形にしたほうがいいかなということで。	定員は満たして。しかも、こちらが意図する、要するに、同じ方を長く見たいということで、週2、3回お見えになられて。変化がよく見えるような形にしたほうがいいかな	定員を満たすことと　同じ型を変化が見えるような形で長く見たい	継続した支援の必要性	継続した支援の必要性	
133	質問者	今、ご両親とも就労する親御さんもふえていますか					
135	施設D	多分、増えていると思うので、療育っていう形にはなってるんですけど、指針の最後のほうに、親御さんの支援みたいなのが、そっと載ってたり。	(両親とも就労）が増えてる	就労支援		療育ではあるが、家族の就労支援でもある	
143	施設D	19時まで。ご飯食べて帰るんです。	19時まで。ご飯食べて帰る	延長　食事の提供	延長と食事の提供のニーズ	延長のニーズと食事の提供の必要性	
147	施設D	働いてる親御さんにしてみれば、やっぱそこは大きいかなとは思うんです。そういう意味では。	働いてる親御さんにしてみれば、やっぱそこは大きいかなとは思う	就労支援	延長保育と食事の提供は親御さんの就労支援として必用	親御さんの就労支援のためには、食事の提供と保育時間の延長も大切である。	
149	施設D	そうそう、学校から帰ってきたら、そのままおやつ食って終わりじゃないっていうような所、いっぱいでしょう。	、学校から帰ってきたら、そのままおやつ食って終わり	開所時間が短いと子どもの活動内容も制限される	開所時間と活動内容の関係	放課後のサービスなので、閉所時間が早いと、活動内容は制限される	
155	施設D	夏休みでもなんでも。そうしますと、今おっしゃったように、両方働いてらっしゃる方ってのは、もう行く所がないんですね、お子さん。その関係もあったりして、別な所のデイサービスなんかも一緒に、行っておいて、なんかそういうことがあったらそっちにお願いしようっていう形での使い方もあるんですね。	夏休みでもなんでも。そうしますと、両方働いてらっしゃる方ってのは、もう行く所がないんですね、、別な所のデイサービスなんかも一緒に、行っておいて、なんかそういうことがあったらそっちにお願いしようっていう形での使い方	共働きの家庭は行くところがない別のデイと併用	共働きの家族は、平日も休日も、就労が継続できる時間帯の利用が必用	親御さんが働いている家庭は、就労を継続できる時間の利用が必用、複数のデイサービスを利用し、セイフティネットにする必要性	
163	施設D	でやってますけど、うち11時から17時。お昼は食べるけど。送迎なんかは、組んじゃうと実際には10時とか9時とかから始まりますけど。	（夏休みは）11時から17時(送迎を含めると10時から9時）				
164	施設D	そういうときって、働いてる親御さんとかってどうされるんですか。11時。					
165	施設D	本当に困ってる人は、別のサービスと併用する感じですか。別ん所行く人もいるし、例えばうちで言えば、自費での扱いをやってる。昔からの流れで。その(＃＃＃＃@00:37:54)日中一時みたいのを利用する人もいるし、移動支援でヘルパーさんを、移動しながら来るっていう人もいるし。それから、あとはもうご家族の協力で、例えば、きょうだいがいればお姉ちゃんが。	本当に困ってる人は、別のサービスと併用する感じですか。別の所行く人もいる　日中一時みたいのを利用する人もいる	他のサービスとの併用、家族の協力　移動支援の利用	他のサービスとの併用家族の協力	自費のサービスと公的サービス併用　移動支援の利用	
172	施設D	うちはT区、もともとK区でやってたっていうこともあって、T区の人、あんま多くないんです。正直言うと。	もともとK区でやってたっていうこともあって、T区の人、あんま多くない	開所当時の地域から利用がある	開所当時の地域から利用がある	継続した家族を含めた支援を行ってきたので、もともとの地区からの利用が多い	
174		今は、でも今、6、7人ぐらいいるのかな。4分の1ぐらい？	開設当初の地区からの利用が多い				
193	施設D	普通校の特別に行くんですけど、なかなか難しいんで、あれと併用してます。学童保育クラブ	普通校の特別（支援学級）に行く　併用	特別支援学級の子どもスキップとの併用	特別支援学級の子どもスキップとの併用	普通校の子どもは学童保育クラブを併用している	学童保育クラブと放課後デイの違いは？
195	施設D	学童と(＃＃＃＃@00:43:59)。学童にちょっと預かってでもらって。	学童保育クラブ	学童との併用	学童保育クラブとの併用	学童保育クラブとの併用	
197	施設D	そこに迎えに行くく。	（学童に）迎えに行く	学童との併用	学童保育クラブへの送迎	預かり時間で、学童のほうが早いので、一度学童にいって、そこに迎えに行く	
200	質問者	そうですね。じゃあ帰りは、一番遠いとどれぐらいの時間かかりますか					
201	施設D	回ったりすると1時間ちょっとかかっちゃうケースも。	回ったりすると1時間ちょっとかかっちゃう	送りの時間は、（長いと）1時間くらい	学童と自宅の距離	学童と自宅の距離により、送迎は1時間くらい	
205	施設D	最後下ろすのは、多分1時間ちょいぐらいであってる。ここまで車で戻ると1時間半ぐらい。	最後におろすのは1時間ちょい　ここまで車で戻ると1時間半	1時間くらいの送りの時間がかかる	送迎時間　自宅との距離	子どもたちが送迎車に乗っている時間は、長い子どもで1時間くらい	

ストーリー・ライン	心身ともに向上させるプログラムでやってきたが、仕事に行くためのお預かりのニーズも増加している。療育の意味とお預かりの意味がある。内容的に、ここがいいと選択して継続してきてくれる子どももいて、継続した支援をするためには、継続してある程度の日数来てくれるほうが良い。一方セーフティネットという意味で、複数の事業所に登録することも安心につながる。学校休業日は10時と短いが平日夜は19時までで夕食を出している。特別支援学校の子が多く、特別支援級の子は、学童と併用していたり、開所時間が短いため、朝学童に行って、学童に迎えに行くということで併用している子もいる。。送りはだいたい遠くて30分くらいの自宅にドアツードアだが、送迎車で回るので長い子は1時間くらい乗っている。
理論記述	継続した支援のためには、週の回数を多く継続してきてくれるほうが良い。しかし、セーフティネットという意味では、複数の事業所を利用していることは安心につながる。放課後デイでの活動として、継続した一定のプログラムを組んでいるが、保護者のニーズとしては、プログラムと保護者の就労支援・レスパイトの意味もある。
さらに追究すべき点・課題	施設Bだけではなく、放課後デイの閉所時間は、学童保育よりも早い。保護者の就労支援のためにはほかのサービスと併用が必要であるが実際はどうか？放課後デイサービス以外の放課後の場として学童保育クラブがあるが、そことの併用の時、子どもたちはどのようにすごしているか。

2019.3.26SCAT WEB site からのダウンロードフォーム scatform1.xls　http://www.educa.nagoya-u.ac.jp/~otani/scat/scatform1.xls2019.3.26

施設Aでは，放課後デイではない放課後の場を利用できる子がいても「家族以外に気持ちの受けとめる」場所が必要で，そういう子どもたちが，放課後デイに戻ってくることもテクストで上げている。施設Cのテクストからも「自分の気持ちを伝えられるようになって」放課後デイを退所する子どもがいることがわかり，その子どもたちが退所後に相談する場や自分の気持ちを話す場は必要である。施設Aと施設Bでは学童保育クラブを利用していても，放課後デイを選択する子どもがいることがテクストに上がってきている。子どもたちの相談の場の必要性とともに，学童保育クラブの環境を整えることが必要である。

5　まとめ

今回調査した事業所では，「子どもたちに一貫した支援が必用である」という考えのもと設立している一方で，利用待機児童がいること，家族のニーズが，放課後に活動する場所の必要性だけではなく，家族の就労支援と学童保育クラブと同じ役割が求められていることが示された。放課後デイを利用する子どもたちの中には，学童保育クラブよりも放課後デイを選択する子どもたちがいることが示され，子どもたちがどういう理由でその選択をしているかについては，この調査では明らかにできない。今後，学度保育クラブでの障害をもつ子の活動の実態と活動場所の環境について調査を進める必要がある。

参考文献

1）大谷尚：4 ステップコーディングによる質的データ分析手法　SCAT の提案 ―着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き―，名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）第 54 巻第 2 号，27-44，2007
2）みずほ情報総研株式会社：放課後等デイサービスの実態把握及び質に関する調査研究書，https://www.mizuhoir.co.jp/case/research/pdf/r01shogai2019_04.pdf〔2020.10.20〕
3）牛木彩子：放課後等デイサービスの利用児と活動（遊び）について　放課後等デイサービスの実態調査，建築学会学術講演梗概，2018
4）牛木彩子，定行まり子：障害児の放課後支援の変遷，日本女子大学大学院紀要家政学研究科人間生活学研究科 26，29-36，2020